



闘争の歴史と孫子の兵法 (20世紀最大の悪人)

4月④のごあいさつ

山内公認会計士事務所
2022年6月3日(金)

人類の歴史は、ロシア侵攻の今に至るまで戦争の歴史である。

やるべきでない攻撃は人類のために絶対に行ってはならない。

一般の住民が、戦争の巻き添えになって死亡することなどということがあってはならない。ところが、今行われているロシアとウクライナの戦争においては、日常時のごとく一般住民が犠牲になっている。

1944年、太平洋戦争において、B29による東京都をはじめとする諸都市への焼夷弾の投下が戦争史上初めて行われた。これは戦闘員・非戦闘員の差別なく焼き殺し、軍事施設も一般民家も変わりなく焼き払うという新戦法であった。

そしてもっと恐ろしい攻撃は、「原子爆弾」によるものであった。

「広島・長崎の跡」は、まさに超高温による焼き打ちである。これは人類滅亡の行為であった。

このような経験を経ても尚、ロシアーウクライナ戦による犠牲は出続けている。ロシアーウクライナの権力者は一般住民の死をどのように受け止めているのだろうか。何故、停戦を行わないのだろうか。

数年前、広島へ行ったとき、「広島平和記念資料館」を参観した。

展示館の中は、当時の戦況が部分部分に展示され、それはすさまじいものであった。高熱で焼けただれた建造物や地面に影になって消えた人の跡が残り、その犠牲のすさまじさは、言葉に現せるものではなかった。それらを通り過ぎて、出口の前にテレビの受像機があり、アメリカのトルーマン大統領が演説していた。

「大戦を終わらせるため長崎と広島に原子爆弾を投下したことの演説」であった。原子爆弾の使用は、試作後間の無い未完成の段階の試験であり、ライバルのソビエトのスターリンに対する牽制であることは明白であった。この行為は、「20世紀最大の悪人」のする行為であり、アメリカの大統領は、ヒットラーを超える20世紀最大の悪人であると考えた。

孫子は、その「火攻編」において言う。

「主は怒りを以て師を興すべからず。将は愠りを以て戦いを致すべからず。利に合して動き、利に合せずして止む。怒りは以て喜びに復るべく、愠りは以て悦びに復るべし。亡国は以て存に復るべからず、死者は以て生に復るべからず。」

参考：「孫子」の読み方(山本七平)、司馬遷史記(徳間書店)